

戸隠伝説

半村良

戸
半 隱
村 伝
良 説

講談社

戸隠伝説

定 価 八八〇円

第 1 刷 昭和52年11月4日発行

著 者 半村 良 (はんむら・りょう)

発行所 株式会社 講談社・発行者 野間省一

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表)・振替 東京8-3930

印刷製本 株式会社 トータル・ブック・プレス

© RYO HANMURA 1977 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

戸
隠
伝
説

装幀・本文イラスト

花輪和一

第1章

1

地下鉄広尾駅の階段をあがると、青山から芝白金方面に抜ける幅の広い道へ出ることになるが、その道路はちょうど渋谷区と港区を分ける境界線になっていて、付近には各国の大使館が点在している。スイス、ノルウェー、西ドイツ、ホンデュラス、中国、フランスの各大使館などで、更に港区側へ入り込めば、サウジアラビア、オーストリア、エジプト、スエーデン、韓国、ドミニカ、イラン……もっともドミニカのは公使館だが、そういうわけで南部坂の有栖川記念公園のそばには、外国人向けのスパー・マーケットがあり、他では取扱わないような商品が並べてあったりする。

よく手入れの行き届いた有栖川記念公園は、広尾駅からゆっくり歩いて五分ほどの所にあり、その敷地の中には東京都の中央図書館がある。五階だての明るい感じの建物で眺望もよく、蔵書もなかなか充実しているし、一般への館外貸出しこそしていないが、開架式だから、調べようとすること柄が漠然としているような場合には至って利用し易い。

入口を入ると二基のエレベーターがあり、その右にロビーのようなスペースがあつて、椅子がたくさん置いてある。閲覧者が多いときはそこで順番を待つ。その左に受付があつて、入館者一人一人に、ナンバー・プレートのついたキーを渡してくれる。そのキーはロッカーのキーで、入館者はまず

キーをもらつて突き当たりのロッカー・ルームへ行き、鞆などの所持品を置いてから引き返し、受付の右の通路から内部へ入る。一階の中央には抽斗式の索引ケースがあり、総合的な索引カードが収められている。その西側の壁ぞいに大きな木のテーブルが並んでいて、そこが閲覧所になっている。間仕切り用の衝立がとびとびに置いてあり、左の奥には書架があつて、その書架で目立つのは世界各国語の辞書類である。そばにインフォメーションのカウンターがあつて、いつも男性の係員が閲覧者の相談を受けている。コピーのコーナーは入口寄りの階段の前にあり、そのあたりにはいつも資料を複写する閲覧者で人だかりがしている。一階は主として新聞や雑誌類を扱っている。

井上昭はその日、三階の閲覧所の一番奥のテーブルに陣取つていた。三階にもインフォメーションのカウンターがあり、その前に三階用の索引カードの棚があるが、井上の前にはすでに五冊ほど、部厚くて古びた書籍が積みあげてあつた。三階は人文地理、歴史関係の書物が集積してあるのだ。

大きなガラス窓から、つい睡くなるような午後の陽ざしがいっぱいに射し込んでいて、井上はそろそろ煙草を吸いにフロアーへ出ようかと考えていた。勿論閲覧所は禁煙だが、階段とエレベーターがある各階の入口のフロアーは仕切りの外になっていて、椅子は置いてないがスタンド式の灰皿が幾つか置いてあつた。最上階には食堂もあり、食事をしたりコーヒーを飲んだりすることもできるのだ。

試験のシーズンではないので、図書館は比較的閑散としていた。井上の前に積んである書物のひとつは、戦国大名の蒲生家に關するもので、彼は蒲生氏郷が没した直後の蒲生家内部の事情を調べているのであつたが、ほかの三冊は、慶長年間に日本海沿岸へ南蛮船の出入りした事蹟を探し出すための資料であつた。

その日の收穫は、当時松江あたりに発生した一揆に關して、紅毛碧眼の異人が指導者として存在していたという記録であつた。井上はそれを探し当てたことで大いに満足していた。水戸宗衛のうれし

がる顔が見えるような気がした。水戸宗衛はいま慶長期を舞台にした小説を書いている最中で、主人公がそろそろ北陸方面へ立ちまわる段階であつた。

五冊目は日本の狩猟史と言つたようなごく珍しい本で、井上のノートには山形県の南西部にある小国町こくにに関するメモが記してあつた。水戸宗衛が小国という山深い土地を、その昔マタギの一大根拠地ではなかつたかと言ひ出し、是非その証拠になるような記録を調べ出して来いと井上に命じたのであつた。だが、その狩猟史によれば、小国という地名は四カ所にわたつて現われるものの、全部書き写しても大学ノートに三行ほどの分量でしかなかつた。

井上は目の疲れを感じて、大きなガラス窓の外へ視線を移した。公園の樹々の緑が細かい文字を追ひ続けた目にころよかつたが、同時に彼自身のまっ黒な髭ひげに埋もれた顔が、そのガラスにうつすらと映つていた。そして、明るい花模様のブラウスを着た女が、両手に本をいっばいにかかえて近寄つて来るのも映つた。

その女は井上のとなりの椅子に坐るつもりらしく、どきりとテーブルの上へ運んで来た書物を置いた。そのとたん、重ねてあつた書物が崩れて、井上のノートの上へ部厚い一冊がころげ落ちた。そのはずみで、鉛筆やボールペンを入れてあつたプラスチックのケースがテーブルからころげ落ち、書架も閲覧テーブルも含めたワンルームの大きな室内に、ガシャン、と大きな音が響いた。

「あ、すみません」

女はあわててケースを拾ひあげるために床にしゃがみ、同時に椅子に坐つたままそれを拾ひあげようとしたりと、奪ひ合うような恰好かっこうで手をもつれさせた。井上は女の白い手のぬくもりを感じて、あわてて手を引いた。女は床に散乱した鉛筆やボールペンを一本一本ケースにいれ、最後に壁ぎわへはね飛んだ消ゴムをしようと、

「ごめんなさい」

と言いながら、おずおずと井上の前へ置いた。

「鉛筆の芯が折れてしまいました」

長袖の花模様のブラウスにジーンズをはいている。スタイルからすると女学生風だが、どこことなく落着きがあつて、言葉づかいも折目正しかった。

「いいんですよ」

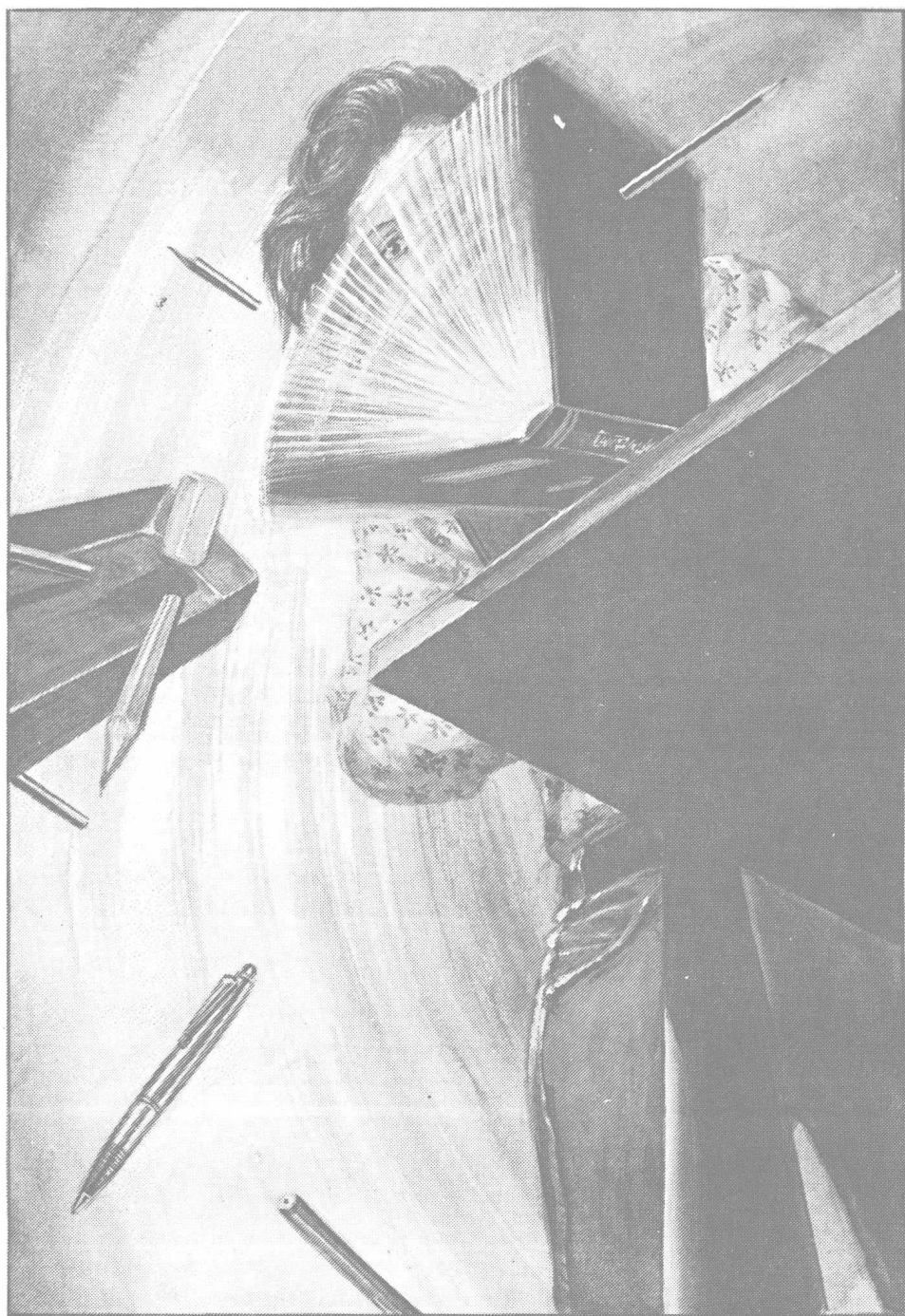
井上は軽く笑つて見せ、ケースの蓋ふたをすると、落ち易いテーブルのふちから、もっと中央のほうへ押しやつた。静かな閲覧室にけたたましい音をたてさせた部厚い本は、まだ井上のノートの上にかぶさつたままだった。

日本古地図集成・上信越編。井上は帙ち入りのその本を両手で持ちあげて、女の椅子の前へ移してやつた。

2

その小さな出来事をきっかけに、井上昭は借りた本を返すと一階のロッカー・ルームへ行き、黒いシオルダー・バッグをロッカーから出してノートや筆記具をしまい、図書館を出た。広尾から地下鉄日比谷線に乗って次の恵比寿駅で国電に乗りかえ、渋谷で降りて地下鉄新玉川線の三軒茶屋へ行き、そこからもう一度二輛連結の世田谷線に乗りかえて上町駅に着くと、時間はもう五時近かつた。

水戸宗衛は三年ほど前から、その上町駅近くのマンションの七階に部屋を借りて仕事場にしていく。井上は水戸宗衛がその仕事場を作つて以来、ずっとアシスタントをつとめていた。と言つても常勤ではない。自分自身も翻訳の仕事を持っているし、水戸の仕事にしても、毎日必ず井上の手助けが



要るというわけではないのだ。そのかわり、水戸が締切りに追われたすと、時には水戸の口述する文章を筆記するために、二晩も三晩もその仕事場へ泊り込むこともある。いよいよ切羽つまって来ると、水戸が書く原稿を深夜印刷所まで車でピストン輸送するのも井上の仕事であった。

井上はマンションにつくと、まず左側の郵便受けのコーナーへ入って、水戸宗衛あての郵便物が来ているかどうか調べた。部屋の番号順にずらりと並んだ郵便受けのほぼ中央下段の小さな扉をあけると、週刊誌が一部と封書が二通、それに端書が一枚入っていた。

井上はそれを持って突き当たりのエレベーターへ向かいながら、封書の差出人を見た。二通とも銀座のクラブの請求書だった。両方とも井上は水戸に連れられて行ったことがあるが、まだ二十九歳になったばかりの井上には、新宿のゴールデン街あたりを飲みまわっているほうがよほど楽しい感じがであった。

端書はこまかな文字でぎっしりと埋められていて、差出人の名の前に、「水戸宗衛のお客になる会」という肩書と会員番号が記してあった。水戸のファンクラブのメンバーからのものである。

七階へ着くと、井上は吹きさらしの廊下を歩いて行った。冬の晴れた日には、その廊下から富士山が見えるが、今は樹木の多い世田谷の町なみが見えるだけだ。

七一五号室のブザーのボタンを軽く押してから、井上はすぐドアをあけた。昼飯をまだざるそばですませたらしく、左側の下駄箱の上にそば屋の器が置いてあって、そばつゆの匂いがしていた。右側の壁に水戸の友人である野田画伯のリトグラフが二点飾ってあり、正面にかけた加賀のれんの上の壁に、「半分居」という扁額がかかっている。水戸は小説で賞をもらうたび、単独ではなくて二人受賞なので、仕事場にそんな名をつけてよこんでいるのだ。

室内はおおむね和風である。大きさは3LDKという奴だが、とつつきの四畳半を書庫にしてしま

っているから、使える部屋は四疊半と六疊の二間である。手前の四疊半には押入れがついていて、その押入れの中の上段には水戸の仮眠用の寝具がしまっており、下段には日本全土の五万分の一と二十万分の一の地図をしまった大きなスチール製のケースがある。六疊との仕切りは障子で、屋久杉を使った小ぶりの茶だんすの中には、黒の楽茶碗や棗、茶筌、それに中型の鉄瓶などがもっともらしく飾ってあり、略点前くらいはいいつでもできるようにになっている。

井上ははじめ、水戸は茶道の心得があるものとばかり思っていたが、よく付合つて見るとすべて我流で、本人は表千家でも裏千家でもなく、自分のは南千家であると威張っている。それでも結構夜中に抹茶をたてて服んでいるらしい。睡気さましにはいいようだ。六疊は右の壁際に書架を造り付けにした書齋で、松材の座卓に座椅子を置き、東向きのペランダに向かつて執筆するようになっていた。その六疊の横を来客用のスペースにして、小さなソファアのコーナーになっているが、東の壁面の上部にクーラー、その真下にクリン・ヒーターの機械があるので見た目にまとまりが悪く、水戸の友人のインテリア・デザイナーが、或るときそれを囲って小さな床の間のようにしてしまった。水戸はそれが大変気に入ったらしくて、自筆の色紙をかけて悦に入っているが、その色紙の文句というのが、実は落語家の古今亭志ん駒から教わったもので、「される身になってヨイショは叮嚀に」という標語みたいな文句である。いずれにせよ、全体の印象は小料理屋風で、作家の書齋という感じには程遠い。

「ただいま」

井上は靴を脱いで加賀のれんをくぐるとそう言った。水戸宗衛は執筆中である。

「ん……」

生返事が聞えた。井上は四疊半の部屋へシオルダー・バッグを置くと、水戸宗衛の著書を刊行順に

並べたサイドボードで仕切ったキッチンへ入って、冷蔵庫の上のコーヒー・メーカーにコーヒーの粉をいれ、スイッチをオンにした。

「今日は暖かいか……」

書きながら水戸が尋ねる。おとといあたりから外へ出ていないのだ。

「ええ」

井上はそう答えると、四畳半へ入って隅に置いてある複写機のカバーを取った。シヨルダー・バッグから大学ノートを取り出して、図書館でメモした部分をコピーしはじめる。

「ついでにここまで頼む」

水戸は机に向かったまま、原稿を三十枚ほどしる手で座椅子ごしに差し出した。

「はい」

井上はその原稿を受取ると、引きつづきそれもコピーする。

「もうすぐ木村君が来る」

「早いですね」

井上は複写機を扱いながらニヤニヤした。木村というのは水戸がもう三年以上も作品を連載している雑誌の編集部員である。いつもは次の月の四日から五日に原稿を渡すのだが、水戸はどういうわけか今月に限ってはやばやと仕事にかかり、月があらたまらないうちに書きおえようとしている。

コーヒー・メーカーがゴボゴボと音をたてはじめた。

「何時かな……おや、もうこんな時間か」

水戸は万年筆を置いて背のびをした。

「八時ごろには終るな」

水戸はたのしそうな声で言う。どうやら久しぶりで飲みに出る気らしい。

「あしたは一時に外で人と会う約束があるから来ないでいいよ」

井上は黙って原稿の複写を続けていた。

3

井上は複写したメモを未整理資料のファイルに綴じ込むと、コーヒーを飲んでひと休みしてから水戸宗衛の仕事場を出た。家はそこから歩いて二十分ほどの、馬事公苑ばじこうえんの近くにあるが、そのほうへは帰らずにまた二輛連結の世田谷線に乗った。渋谷で高校時代の同級生たちと会う約束をしているのだ。

新玉川線で渋谷へ着いた井上は、宇田川町の教会のそばにある瑠璃るりという喫茶店に入った。かなり大きな喫茶店だが、静かで落着いていて、場所が少し判り難い点を除けば申し分のない待合せ場所であった。

井上は席につくとコーヒーを注文し、シヨルダー・バッグからク・リトル・リトル神話集をとりだして、ラヴクラフトの魔女の谷を読みはじめた。

五、六ページ読み進んだときだった。ふと本から目をあげると、若い女が二人、居心地のよさそうな空席を探しながら近付いて来た。

「ここがいいわ」

先に立ったほうがそう言うのと、入口のほうを向いて坐った井上の、斜めうしろのテーブルについて。あとからついて来た連れの女が井上と視線を合わせた。

「……………」

女は目礼を送って来た。井上は不意を衝かれてあいまいに目をそらしたが、女が通り過ぎてしまつても、誰だつたか思い出せないでいた。

が、読むともなくまた本に目を落したとき、井上は急に気が付いて、なあんだ……と拍子抜けしたように感じた。すぐには思い出せなかったわけである。図書館でとなりの席に坐ろうとした女なのだ。井上は本をテーブルの上に伏せるとハイライトを啞くえて火をつけた。

「おや、またお目にかかりましたね」

目が合つたとたん、図々しくその言葉をかける自分を想像していた。

「さきほどはどうも……」

とかなんとか、その女は答えるだろう。しなやかそうな体つきの、清潔な感じの女だった。年は二十二、三だろうか。自分をもっと女性に対して図太ければ、同じテーブルに誘つて、親しく交際するようになるかも知れない……ついそんな空想をしてしまうほど、自分好みの感じであった。井上は左肩のうしろあたりにその女の存在を強く意識しながら煙草を吸っていた。

すると、待つていた同級生が二人、連れ立って店の中へ入って来た。目敏ざく井上をみつけて手をあげる。

「よう、待ったかい」

電電公社に勤めている谷口が眼鏡を光らせながら近付いて来て言った。

「うん」

井上は笑顔で頷うなずいた。谷口は大してすまなそうな表情でもなく、

「悪いな」

と言つて井上の前へ坐つた。大手の不動産会社の企画課に勤めている島野は、

「こいつが靴をかうというんで付合っただけで、なかなかきめられないで時間を食っちゃったんだ。決断力が鈍いんだよ」

と言いながら谷口のとなりへ坐りかけ、

「おや……」

と剽軽な声で井上のうしろへ顔を向けた。

「丸ちゃん。丸ちゃんじゃないか」

「あら、島野さん」

女の声が答えた。

「尾瀬はどうだった……よかったらこっちへおいでよ」

女たちは席についたばかりでまだ飲物も注文していなかったから、あっさり井上たちと通路をはさんだとなりのテーブルへ移って来た。

丸ちゃんと呼ばれたのは図書館で会ったほうの女ではなく、短い髪をした活潑そうな女であった。

「紹介しよう。みんな高校時代の同級生で、これが谷口、こっちが井上」

「丸山です。どうぞよろしく」

丸ちゃんは見かけどおりはきはしした声で挨拶した。

「お友だちのユミさんです」

ユミと呼ばれた女は物柔らかな微笑を浮べ、黙って頭をさげて見せた。

「よろしく」

谷口が言い、井上は煙草を灰皿に置くと本を閉じながら、ユミと同じように黙って頭をさげた。

ユミ。姓だろうか名だろうか。どういう字を書くのだろう。井上はそんなことを考えながらク・リ

トル・リトル神話集をバッグにしまった。

「尾瀬へ行つて来たんですか」

谷口が島野ごしにテーブルの上へ体を倒すようにして尋ねた。

「まだ少し雪が残ってたわ」

丸ちゃんはこやかに答え、水のグラスを運んで来たウエイトレスに、
「アイスコーヒー」

と言った。みんなそれに釣り込まれたように、同じものを注文した。

「丸ちゃんはカメラ狂なんだ」

島野が教えた。

「ことは徹底的に尾瀬を撮ってみるつもりなの。そうね、月に一度は行かなくては」
「へえ……」

谷口が呆れたように言った。

「尾瀬の四季を追いかけるつもりなの……」

「そう。尾瀬の自然は変化が早いから」

「いいなあ、そういう趣味があるのは。俺なんかだめさ。麻雀ばかり」
井上は失笑した。

「実感がこもり過ぎてる」

島野や丸ちゃんたちも笑った。

「でもよくそんなに旅行ばかりしてられるな」

「女の子って、使うときは結構パツパと使うんだよ」